

「鳩翁道話」上

宮 田 暉 朗

Miyata Teruaki

は じ め に

本邦初めての社会教育として位置づく「石門心学」は石田梅岩が享保14年(1729)に講席を持って始まる。彼は「性とはその実践は？」を求め続け、「尽心知性」に糸口を見つけて、生活の中で学問と修養を通して性つまり「本心・本質」を知り、内面的価値ある心境を高めて、自然発生的な五常の履行を教説している。

若い頃の性格の自己否定と神に寄せる清浄心を原点に、孟子と朱子学の「信者」としてのわきまを教義形成の柱にして、梅岩自身が「慈悲仏 すぐなるは神 まことある聖り心と三つの宝ぞ」と述べた如く、神・佛・儒を渾然一致させた教義である。その元には本性を偽らずに誠の実践に繋げるために「四端の心」を重視して自ら実践している。

本学教職課程履修者の2年生は、自他含めて今一番いけないことは、「政治に興味がないこと・手本であるべき挨拶さえできない大人の生き方・殺人・不況に飲み込まれた否定的生き方と向上心欠如。1年生は隠し事が多い世の中・着服職員・セクハラ教師・夜中に大騒ぎする人・自分のことで精一杯の自分・小1年生の自殺・税金問題と政治の拙さ」を指摘している。これらは非人間的な様相下で問題点や不安や怒りを持っているということの表われであろう。

経済の悪化と政治の貧困と矜持不持に恥知らずで基準なき生活様式は、善を後ろ向きに、惻隱の情なき無縁社会や人道麻痺と衰微、金権を現出させた。大切な人生の節目となる行事や習慣は消え、メディアや携帯文化の闇、尊属殺人、行為の善悪の不明、まやかし、いじめ、他人軽視が頻出する。ここに及んで梅岩思想と、彼から100年後に出て、外国にも道話が翻訳された名手 柴田鳩翁の「鳩翁道話」三までの、卑俗とも言える譬え話や実話で笑いや涙を誘った瞬間に身勝手な自分を反省する処世訓話の現代性をみることを主題にした「上」篇である。

一 本心に従って五常の実践を説く石門心学とその継承

「本心を大切にして、万里万象の本質を考えて無理せず心を磨き正直に生きることで人た

るの本質をつかみ、その認識を持って心が天と一体化なると天理（宇宙の真理）が宿るから、その真理に適う人の道に違わない生き方が可能になる。」とする梅岩哲学は、江戸時代の初期から力を付けた新興商人や生活に追われる農民や学問に疎かった婦女子に支持され、後には幕藩の庶民統治に寄与することになる。この教義は性善説に立つ孟子の教説「自分が本来持っている本心を形成する『惻隠・羞惡・辞讓・是非』の四端の心を発展させた人は、人間の性が本来善であることを悟るので、自身に関わる環境を与えてくれた天の真意（心）が分かり、「性」を知れば五倫五常は自然になされる。」に基づく。人・生活・本心・四端・天・五常・実践がキーワードの本心に正直な生き方の実践を今こそ学ぶべき人の道とすべきであると考える。

梅岩の生い立ちと自然に出る善の発見

梅岩は1685年、丹波の中農に生まれた。生家の北東に八幡神社、その東に禅宗の春現寺、さらに東に氏神の春日大社があったので神仏の影響を受けたと見てよい。11歳で京都の商家に奉公に出るがその店が傾き帰郷して農業に従事する。21歳頃から再び京都の呉服屋に奉公する。この頃から神道を学び人を教化したい思いがつのり「鈴を振って町を巡り人に人たる道を勧めたい。」と考え寸暇を惜しんで儒学・老莊・仏教書・徒然草・日本書紀などを読み研鑽する。呉服屋の祖母がこれを支援するが特定の師は持たず、京都は学問が隆盛していたので講義を聞き歩いたと述懐している。「なぜそのように学問するのか？」という同輩の問いに「古の聖賢の行いを見聞きし、人の手本になるべし。」と答えて、道を説く自分のあり方を常に模索し、呉服屋では、商人としてよく生きるありかたを求めて直面する問題への回答を作っては後年に備えていたという。また、自性とは何かを知り、心の誠のあり所を探り続けている。

「性とは何か、なぜ必要か？」について悩んだ30代後半に禅僧の師 小栗了雲に「性の本質を疑っている時点では理解に至らぬ。自性は万物の親と見たる処の目が残り有り。自性という物は目なしにこそ有れ其の目を今一度離れ来れ。」と叱責されるが、ついに、自性見識の目を離れるとは、主観を脱して客観的にみる境地になり天地に自分を委ねて忘我の境地でなすことがよいという心境を得る。また、40歳の頃に母親を看病した際「正月に忽然と開く。その時あおぎみれば鳥は空を飛び、ふして見れば魚は縁に躍る。自身ははだか虫。自性は是れ天地万物の親と知り、喜悅誠に大なり。」 天の原生まれし親まで呑み尽くし自讃ながらも広き心ぞと言う歌に開悟の心境を爆発させる。「性についての疑いが散じ堯舜の道は孝悌忠信のみ、性は天と万物の親と知る。文字のするところにあらず、修行のするところなり。」と心眼を開き、性は万象の核心だと開悟する。

彼は、当時誰も示せなかった新興勢力の商人にあるべき道《ありべかゝり》と武士の精神の保持を促し、儉約論を立てる。1744年の著「儉約 齊家論」で「儉約を言うは他の儀にあらず、生まれながらの正直にかえしたきためなり。」と述べて、その正直発揮ができない理由は私欲にあるとして、私欲に基づく節約を吝嗇として否定している。

借金を抱え全てを洪水で流された商人に「世間に喜ばれるならば、全てを売りはらって赤裸

になって借金を払え。そうすれば、世間は類まれな正直者で神の正直とおなじになるから、金を貸している人も実に正直な人だと感服するだろう。人の心には本来、慈悲と正直が備わっているのだから、それらの人々が集まって支援してくれるだろう。」と正直第一の商人道を教示した。「正直は鏡にものが映り、ものに影ができるように間髪をいれずに生じるもの。」であって、あれこれ考えてなすのは正直ではない。嘘をつくまいというのは正直ではなく、利害損得を考えずに本当のことを言い、私利私欲なく嘘を言うのは正直だ。更に、儉約は仁の本で、儉約の本が正直で私欲ない正直が全ての根本だとして、比咩大明神の託宣の「天にならひ地にうけたりし人心まがりざりせばすなはちの神」という歌を引用して、私欲を去った正直、つまり「ありべかゝりの正直」が人を神にするのだと指摘する。また、「天命のわが身にあることを知るべし。神の御心は鏡の如し。何ぞ鼯鼠の私あらんや。それに成れることあるは、神の納受といふ。」と都鄙問答で述べて、人は天命を授かってこの世にいる身であるから天命を心に銘じていくと、願わずとも神は願いを聞いてくれるとして、自然に出る正直を勧め不実行為を否定する。

尽心知性と正直

都鄙問答の「性理問答」も「性をしること・心を知ること」が中心で、学問の至極は、心を尽くし性を知ること、性を知るは学問の綱領なり、修養のもとには学問はあるが、学問は文字を知った上で実践に生かす事だ。其の性と言うは、人より禽獸草木まで、天に受け得て以って生ずる理なり。松は緑に、桜は花、羽あるものは空を飛び、うろこあるものは水を泳ぎ、日月の天に懸かるも、皆一理なり。去年の四季の行わるるを見て今年を知り、昨日の事を見て今日を知る。これ即ち所謂、故（あと）を見て天下の性を知るといふ所なり。性を知る時は、五常五輪の道はその中に備われり。中庸に所謂、天の命之を性といひ性に率ふ之を道という、と述べて天命を拝して、自然体になって全宇宙的な天意を正直に実行することが人の道だと説くのである。

また、「士農工商は天下の治むる相（たすけ）となる。～それは職分の別であり、人の道に別はないと断じて、士農工商の身分は認め「今日のわが身のある所、即ち、天命とする。」としながら、形に貴賤ありとした。最下層に位置づく基準については、商人の買利は武士が禄を得ると同じく「売利を得るは商人の道なり。」買利なしは武士の禄なきと同じだと援護しつつ、利を貪る利を否定して、正直一途な「ありべかゝり」にあるとしたのは卓見で、ここを現代人のむさぼる行為者は学ぶべきである。

梅岩は「神・儒・仏の何れも心を磨く道具で、一つも捨てず、一つに拘らず、どの教えも心を悟るため」としつつも、朝夕の拝礼順序は、天照皇大神宮、竈の神、在郷の氏神、孔子、弥陀・釈迦仏、師、先祖父母の順序があると決めていた。心だに誠の道にかなないならば祈らずとても神や守らん（歌林四季物語 1686年）の一首が「心学カルタ」冊子の表紙に採録されていることから、「発明」という心学者に求める悟りの境地獲得の原点には、敬神神明と崇祖の念で祈る清浄心保持が不可欠であることを明示している。

石門心学の継承者

石門心学は手島堵庵、中澤道二、脇坂義堂、柴田鳩翁などが発展させる。堵庵は人倫の自然体での実践を説き「利欲に走るのは身勝手であって、心の向かうところが我が身の利福だけにあることは自然ではなく、ありべかりにそむく事になるのだ。」とする。正直について「思案なしの明德を知って、この身をその明德次第に任せる。仁を尽くすには、人との交わりに不実なき無私をもってあたるべき」とする。「朝倉新話」で「道を学ぶは知れた通りをするを言います。商人ならば商いに精を出し、それぞれの道を尽くすことで、これを学問といいます。たとえ書じゃくを読み、文字の詮索ばかりして、なりふりを虚飾に従って、今までの商いをやめますのは、差錯なことござる。わが家業をよう勤めるを学問といいます。」と述べて実践第一を重視して心学の教化伝導の最大の功労者となり性を「本心發明」とした。

中沢道二は、道話の形式を確立して江戸で好評を博し「形をすてさり、迷妄の立場から人を救うは、死の覚悟、即ち、本心を自覚し、武士の本領である死の覚悟」を求めた。武士の軟弱化も有って、播磨山崎藩主 本多肥後守が入門し、各藩でも心学塾は盛りを迎える。道二は、幕府のお触書「一 憐れむべし 一 家業をもつばらにし分限を超えない 一 人の害になることをしない 一 博打禁制」を教材にして「幕府の触書のごとくすれば家内安全、商売繁盛、子孫長久のご祈祷じゃ。」と講じて心学を社会教育の機関として発展させる。

彼らは道話で、正直と儉約の一体化を根本教義に人助けの節約を儉約として庶民に勧めるが、四書五経・孝経・小学・大極図説・近思録・性理字義・老子・莊子・和論語・徒然草等を道話に取り込み、神道は呼吸、朱子学は頭脳と心臓、仏教は血肉、修行を骨格とした梅岩精神を受け継ぎ「会輔、静座」で研鑽を積んで無償で講義した。

柴田鳩翁の前職は講師で、石門道話の名手として仁を説き、その譬喩話は各種人間の見本市の状況を呈して秀逸で、現代人にこそ本心に従った意の用い方は参考になる。

須坂藩は、12代藩主 堀直武（1830年～1862年）の時に、藩借財44187両に上り、石門心学の石田小右衛門を招いて藩財政改革を託した。彼は、領内を回って儉約貯蓄をすすめて経済の更生に功があったといわれ、この精神は須坂気質になったという。宝珠を描き、上部に「難の中に難をたのしめば難なし 貧の中に貧をたのしめば貧なし」という書軸が現存し、本心の用い方や儉約を説いて後々まで人口に膾炙された点で信頼度がわかる。

二 柴田鳩翁「鳩翁道話」の例話の現代性

「鳩翁道話」は彼の道話の聞き書き集で、その理解をし易くするために例話や和歌や教訓歌も引用する。平凡社1970年刊本鳩翁道話の書き出しは仁の導入として「孟子曰ク、仁ハ人ノ心ナリ。義ハ人ノ路ナリ。ソノ路ヲ舎テテ由ラズ。ソノ心ヲ放ッテ求ムルコトヲ知ラズ。哀シイカナ。」仁は難しいのでたとえ話を申しませう。と言いはくらの薬 のたと

え話から始める。これは道話全体の導入にもなっている。

霍乱の薬を売るのに、看板を今大路という名医師に依頼すると、『はくらんの薬』と書いたのでそれは違うと抗議すると「霍乱と書けば鞍馬口は京への出入の在口、往来はきこり、山賤、百姓ばかりだから分かりやすくするためこう書いた。」と答えた。「心学道話は識者のために設けましたことでは御座りませぬ。ただ家業に追われて暇のない、お百姓や町人衆へ、聖人の道あることをお知らせ申したいと、先師の志で御座りますゆえ、ずいぶん詞を平とうして、たとえをとり、あるいはおとし話をいたして、理に近いことは神道でも仏道でも、何でもかでも取り込んでお話し申します。軽口話のようなとお笑い下されるな、これは本意ではござらねども、ただ、通じやすいよう申すので御座ります。」と述べて、仁と義の道話から始めて身勝手を捨てて本心に立ちかえることを主題に分かりやすく話していく。尚「一の上」は、「仁は人の道」を主題にする道話で「さざえの自慢」という例話迄である。

仁、無理のないこと（注 「仁の發揮は無理のない心から」がテーマになっている。）

一の上・下篇は本心に従って生きるとは、その本は無理のない心からが中心になる。

「孟子も無理の無いのが人の心だと仰せられた。例えて言えば、この扇は鼻をかむ人も、しりをぬぐう人もいない。扇のあるべきように礼儀に用いるか、風を求めるかこのほかに仕様はない。親御様を親とご覧じたらご孝行なされるが子たるものありべきよう、これが仁なり、人の心で御座ります。親に口答えしたり、親を泣かせたり、主人に心配かけたり、夫に腹を立てたり、女房に心使いをかけたり、弟をにくんだり、兄を侮ったり、世間に難儀をかけ散らすは、皆、扇で尻をぬぐい、見台を枕にしてござるというものじゃ。お互いに無理のない心を持って生まれましたのは有難いことであり、この無理のない心をわが方では本心といいます。すさまじきことをすると腹の中が心悪う覚える、これが、無理のない心を持って無理をするゆえ、心がねじれて心悪いのです。」と話して古歌を引用する。 鳴滝の夜の嵐にくだかれて散る玉ごとに宿る月かけ 「月は一つだが散る玉ごとに、おのおのその影を宿す天理の妙用、仁は一つの仁なれども万人が持っている。この無理のない心を持ってすれば皆あるべきようになって、孝行忠義もおのずからできる。たった一つ合点すると、百年学問した人と、行いにおいて何も変わらない。本心に従って、これを先生として稽古されるがいい。わが本心を師匠にすれば、祝儀もいらす見舞いもいらすに、心安く忠孝はつとまる。これは安物でも買いかぶりでもないから、押し切って本心に従うことがよろしう御座ります。中庸には『性ニ率フ。之ヲ道トイフ。』と有り、お勤めなせれませ。」と結び、本心、無理のない心を合点すると五常は実践できるのだと説いている。

義 無理をせぬこと（道は何処にあるかを考えよ）

義は人の道なりとは無理をせぬことなり、無理をせずに人や万物と交わることがよいが、道が何処にあるか考えるべきだとする道話で、無理はしないが、本道は日常生活に有るのだという例え話は現代人に参考になる。

「無理をせねば人交わりは申すに及ばず、万物と交わってよろし、ゆえに、古人は『義ハ宜ナリ』と仰せられた。家来は奉公に精を出し、嫁としては舅姑に孝行し、夫を大切にすることがよろしい。道とは古人のいう『道ハ尚大路ノ如シ』で、どこに行くにも道がある。道を行かないと溝へはまったりする。人もよろしくないことをすると道ではなくなる。子は親に孝、妻は夫に貞、などいちいち言わなくても知れている。親をなかせたり人を恨んだりする。これはよろしくない。この道はどこにあるやら、とくと考えなければなりません。」と話して師の中沢道二の体験話を続ける。

ある豪農のところ逗留したとき、心学に心酔したその家の主人の娘が、花をいけ、茶を入れ琴を弾き、歌を詠い慰めた。主人は、「嫁入りして先方で恥をかきませぬように、松明、花むすび、画も習わせた。」と自慢話になると、道二は「肩腰をもむ按摩の稽古もおし込みなされたであろう。」と言うと、いささかむっとして、「貧乏はしていても按摩の稽古は習わせぬ。」道二は笑いながら「それは近頃お心得違いで御座りましょう。貧乏金持ちによらず、女は夫の家にかしずけば、先方の親たちをわが親として仕えるが道じゃ。舅姑がご病気のときに、絵かき、花むすび、茶や花ではごかいほうができませぬ。嫁御が真実に親たちの肩腰などをなでさすりして後介抱をなさるが、嫁御の道で御座います。とかく、役に立つお稽古が肝要じゃ。」と話すと、主人は大きな我を折り、赤面したと伺いましたと述べて「腕さすりの介抱を心がけるが、子たるものの道じゃ。これで、道はどこにあるやら、とくとよくお考えなされませ。」と断じる。生活に役立つ孝行のあり方は参考にするべきである。

本学教職課程の2年生は、女の道や義務としての肩さすりは異論ありだが気遣うためのさすりは大切だと述べ、1年生は ⑤勉強ができてでも日常のことができないと偉くない。④介護をする子がないので祖父母や同年代同士で看護するというニュースを見たが、孝行とは何かを考えた。③あまり気持ちのいい話ではない。②花やお茶ができればちょっとしたことで利用できる。等を話した。(数字は自分にとっての重要度の評価で5が最高点)

三味線を弾くと面白いと思っていると短慮になり、ろくでもないことになるとして、「遊所近い所では、三味線の稽古や芸者の風俗を見習わす。じゃによって娘らしく育たず、親の目を盗んで逃げたり走ったりする、これは親の育て方が悪い。」四つの袖という端歌に、うき中のならひとしらはかくばかり花のゆふべのちぎりとなるも がある。

「若い男と女が親の許さぬ縁結び、おもしろかろうと思いのほか、思うようにならぬ、憂いつらい世の中じゃと知ったら、こうは狭いものと後悔した文句で御座います。世帯を持ったらうれしかろうと、鍋尻こがさぬ畑水練のむちゃくちゃ思案、面白くもなんともない。ただ今日に追い回され、髪も形もかまわばこそ、すき髪に前垂れ帯、ふところに子をねじこんで、みそこしさげて歩いてみたがよい。これ、親の教訓を聞かず、時節到来をまたずしてはやまってにわか所帯、これはたかが知ったことじゃ。みな己が己がいたずらから。それを何の分別もなう、三味線さえ弾くとおもしろいことに思い、女の子に三味線をだかえさせ、仕方ないゆえ、つぎ棹に上りついてキイナ声を出して唄うを喜んでいる親はお気の毒、うろたえると親を捨てたり、かけ落ちしたりすることがあるものだ、浮気らしい花やかなことは

ヒョンなことができます。「四つの袖」の作者の心も同じことで、いたずらを誡むる教えの道じゃ。」これについて面白い話が御座います。

京の蛙と大阪の蛙（一の上、人の道を行うには、目のつけ所を誤らないこと）

「心を放って求める事を知らぬ」「高慢の危うさ」を主題に、2話を引用する。

京に住む蛙が大阪を見物したいと考えて天王山まで来た。大阪にも京都を見学したいと思って天王山まで来た蛙がいた。両方、ここがなにしよう天王山の嶺、京も大阪も見渡せる。大阪の蛙は花の都と聞いたが大阪と違わぬ。京の蛙も、音に聞こえた難波名所も京と変りはない、ナント互いに足つまだて、背伸びして見物したら足の痛さも助かるう、苦しいめをして歩くより帰ろう。と相談して帰ってしまう。これは、何ぼ見渡した心なれど、蛙は目の玉が背中についているので、やっぱりもとの古さとを見たのじゃ。何ぼにらんでいても目のつけどころが違うことに気がつかぬ例えだ。ある人の発句に 手はつけど目は上につく蛙かな がある。

「ハイハイかしくまりました。左様ごもつとも。」と口には言えども、目は上につく蛙で、俺がおれがの向う見ず、これを「其ノ心ヲ放ッテ求ムル事ヲ知ラズ。」と申します。おれが体でおれが働き、おれが金をもうけて、おれが口に、おれが物を食うのじゃ。人様の世話にはなるまいし、おれがでなうて、どうして世間がわたれるものじゃ。という人がいるが、心得違い。お上様のご政道が無かったら、一日もおれがでいらぬ。義経軍が摂津の国に押し寄せたとき、弁慶に下知して谷の家に火をかけたように、天下の乱れがある時は、すっぽんの間にもあわない。貸付の証文が三百貫ありとして土佐踊りしても、背中に目のある蛙、寝ているうちの大松明になるやら、大地震が起ころうや知れぬのが浮世の有様、この頼まれぬということのたとえ話があるとして「さざえの自慢」になる。

蛙の話の一年生の反応は、②・④もっと客観的に視野を広げることが大切。周りを見ないととんでもない事になる。今に通用する。④見方の問題。2年生は、②実際に見てないのに映像で済ませてしまうので実際体験をするべき。④見ようとしなければ見えないと自覚した。などがあり、興味深くわが身によせて現代に生きる教訓性を認めている。

さざえの じまん（何が頼りになるのか、己に立ち返って吟味し、俺が俺が危ういことの戒めが主題である。）

難に際してはさざえが内から蓋をピッシヤリ閉めて大丈夫だと思っていると、鯛や鱸がうらやましがって「お前の要害は、うちから閉めたら外からは手が出ぬ、結構な身の上ぢゃ。」と言え、お前方はそういうがあまり丈夫なこともない。しかし、マアこうしていれば難儀なことはない。」と、卑下自慢をしている時、ざっふりと音がする。さざえがふたを閉めて「今のは何であったかは知らぬ、網か釣り針か、要害を常にしておかないとどうにもならぬ。鯛や鱸はとられたかも知れぬ。だが、おれは助かった。」もうよかろうと、そっとふたを開けると、魚屋の店に、「このさざえ十六文」と正札付きになっていた。おれがおれがと思っていると家も蔵も、知恵も分別もまるで見取られてしまうこととは知らず、気の毒なさざえな

り。と話して、ある人の道歌を引用する。

梯なうて雲のそらへはのぼるともおれがおれがはたのまれもせず

これは「其ノ心ヲ放ッテ求ムルコトヲ知ラズ。」と言うことであり、わが身に立ち返らずに、ただ、向こうへと目のむくが放心であり、放心じゃというて、心が飛んでしまうのではござらぬ。身に立ち返ることができぬのだ。器量、奉公人、を頼み、知恵、分別を、力、格式をたのみ、これさえあれば大丈夫だと思つて御座る人は皆さぞえのご連中じゃ、身に立ち返つてご吟味が肝要だ。己の高慢は頼りにならぬというこの話を子供達に是非聞かせて、放心とか頼りにならないもの、「ぼんやり」ということの核心について考えさせたいものだ。

「一の下」は仁の続き話で「心の紛失」を語る。犬がいなくなると探すのに、わが身に立ち返つて心をたずねる事をしない。文字の詮索は心の行方を捜すためであり、心を求むるとは、わが身に立ち返る事であつて、善悪に立ち返ると仁か不仁のどちらかになる。

「のら息子」では極道の息子の話。「親心の慈悲、息子の改心」で放蕩息子を勘当する親心の虚しさについて梅岩の 子にまよふ親の心を見るにつけ我がかぞいろもかくやありなん

・円位上人の 何事のおはしますかは知らぬ共忝なさに涙こぼるる も引き、 とくさ
 かるそのはら山の木の間よりみがかれ出づる月のさやけさ の一首をもつて親の大慈
 大悲によって子が改心する親の心境を月のさやけさに例えている。心の楽は極楽、心の
 苦しいは地獄、親の苦楽は子の所作に有るといふ孝行論は若い人に論議してほしい
 ものだ。

「二の上」(心は身の主・心のゆがむわけを話すために3つのたとえ話を引く)

孟子曰く、今無名の指あり。屈んで信(の)びず。疾痛事に害あるにあらず。もしよくこれを信ぶるものあるときは則ち晋楚の路を遠しとせず。～後略。これは「仁は人の道なり」の次の章であると前置きして「則ち学問の道他なし。その放心を求むるのみ。」と話す。

「羞恥の心は義の端」と申すが恥には二様ある。姿の恥を知つて心の恥を知らぬ人がいる。心ほど大切なものはない。心は身の主と申して、一軒の家では旦那殿と同じことじゃ。その旦那殿の心が煩い苦しんでいるを捨てておいて、家来の体ばかりかわいがり、膝頭すりむいた、ほくちを付けい、灸がいほうた、膏薬を張れ等 からだのことは世話をなされるが、心のことは一切お構いなし。人に生まれて人のような心を持たず、鬼のような心を持つたり、蛇のような心を持つたり、鳥のような心を持って、恥かしいとも思わず、からだばかり吟味してござるは、どういうところから間違つてきたやら。また、祝儀に招かれて、隣の皿が自分より大きいと目をむき、おれに意趣返しでもあるか? などというのは、指の曲がったことのみ恥じて、心の曲がりを苦にしない伝で、孟子は「これを類を知らず。」という。古歌の

かたちこそ深山がぐれの朽木なれ心は花になさばなりなん を引き、心の曲がりは蒔絵の重箱に馬のくそを入れたようだと結ぶ。

「心のゆがみ・おさんどんと長吉」編では、顔に墨が付いた事の指摘は喜ぶが、「足下のご

心術甚だもってその意えませぬ、ちと心を正直にお持ちなされ、心のゆがみは見えて見苦しうござる。」と世話などしたら、真っ黒になって腹を立てて激怒するだろう。心は人の目にかからぬから、ゆがんでいても苦しゅうないとして無分別を起こすことになるということの意味や心の世話についての現代的意義は家庭や学校で大いに論議したい。

中ニ誠アレバ外ニ形ハル（吝嗇は人の心を苦しめる）

客が帰った後のご馳走を台所に運べと言われてそれをつまみ食う話から始まる。心に思うことは皆形に出る。ある人は金銀の良し悪しの見分け方は初めに良い銀を覚えさせる、これと同じく本心の正銀を見分ける力をつけたい等、話の面白さは佳境に入る。次篇「人の泣く音を鹿が聞く」は、鹿の鳴き声を寺で聞く遊山の町人達が、金銭、放蕩、嫁姑の諍い等の散々の繰言身の上話が終わって「未だ鹿が鳴かぬか？」と障子を開けると廊下に鹿がいた。「何故鳴かぬ」と責めると鹿が泰然として「お前たちの泣き言を聞きに来た。」と落とす。「皆心をわずらっている、身びいき身勝手、ならぬ事を無理やりしようとするから苦しうける。難儀は難儀として受け入れればいい。中庸に「富貴貧賤夷狄患難、君子入ルトシテ自得セズトイフコトナシ」とある。心を脇に捨てて、形の楽を求むから奢に移り吝嗇になり心に苦しうけて泣く事になるのだというまとめは、奥が深くためになる説話である。

「二の下」（心のゆがみを捨て置いて体を案じている不幸）

心からよこしまにふる雨はあらし風こそよるの窓はうつらめ の古歌で始まる。

「真直ぐな息杖」では、人の心は生まれつきは真直ぐだが見たり聞いたりしてゆがむ。細い竹も真直ぐ立てると20貫に耐える。すぐなればおもにかけてもをれぬなり世わたるわざの息杖ぞかし の一首を添えて、真直ぐであることの強さを話す。

「若気の過ち」では、わるいとはしりつつわたるままの川流れて淵に身をしづめけり 室鳩巢の 朝夕に保つわが身はから衣たちるにうつせ道の姿を を引き、心が心のありどころにないと無分別が起こる。心こそ心まよはずころなれころに心ころゆるすな と体を暇におくは毒だと説く。手にとるなただ野におけよげんげ花 のように、今日の有り難いことを忘れて他を願うから心がゆがむのだ。

らくがしたくば心をしりやれらくは心のうまれつき という如くで、隣が火事になった八兵衛を助けに行った人達から行灯を借りて、手に持ってあっちこっち走り回りうろたえる八兵衛に、其の訳を聞いたなら「行灯が消えて、火打ち箱を探している。」と言った。火は付いていて明るいのに、火打ち箱を探すは闇がりの心持だ。楽ができるのに苦しんで一生を暮らすのは八兵衛の連中だ。心のゆがみを捨てて、かがんだ指を苦しうに療治のみすることを孟子は「コレ之ヲ類ヲ知ラズトイフ」と、心のゆがみをいさめる。

本学のKさんは①これは自分のことだ、灯台下暗し。Hさんは③それなりに苦勞していれば、行灯以上の光があるのではないかと思った。③気が動転してれば奇行もするからどんなときも冷静に迅速に行動したい、自分自身を傷つけないで。などである。

「三の上」(心を養うことを主題に、2話を引用する。)

「孟子曰く。拱把桐梓。人苟も之を生ぜんと欲すれば皆之を養う所以のものを知る。身に至りては之を養う所以のものを知らず。豈身を愛すること桐梓にしかざらんや。思わざるの甚しきなり。」と述べて、樹木を養うことは知っている人が、己が身を養うことを知らない。だから思いつくことは、銭が欲しい、良いものが着たい、うまいものを食いたい等と、得手勝手なことばかり思いついて、無分別ばかり、これ則ち植え木を育つことを知ってわが身を養うことを知らぬのだ。心を養い、身心一雙と申して、心を養うことができなければ身を養うことはできず、身勝手と申し私利私欲の固まりになる。古歌の つくづくと思へばかなしいつまでか身に使はるる心なるらむ とは、心が主人になって、身を家来として使うときは道にかなう。身に心の使われる口惜しさを詠んだ歌である。身勝手をする人の、はらわたの開帳によつて似た至極尾籠な話があるから、聞いてもらわにやならぬと続ける。

貸し雪隠の話(人とわれと万物は一体・身勝手はめぐりに害になる)

ある人の道歌に 良い中も近ごろうとくりにけりとなりて蔵をたてしよりのち

とかく人の銀もうけが、羨ましくて、ねたましくて、かちおとしてなりとも、おのが田へ水の引きたい例の身びいき、身勝手の強欲ものが、村方にござりまして、あるとき女房を呼んで相談する。「八兵衛が近頃かし雪隠で銭儲けをしおる。おれもこの春はかし雪隠をこしらえて、八兵衛の銀もうけをたたきおとしてやろうと思うが、どうであろうぞ」女房なかなか合点せず、「それはこなたわい分別じゃ。たとえ、こちのかし雪隠をこしらえたところが、八兵衛殿はしにせ、得意もたんとあるであろう。こちはまた新店なり、はやらぬときは貧乏の上塗り、それはやめにさっしやるがよかろう。」ところが、この男、立派な雪隠を作り上げ、仕上げをごろうじろといばる。さらに女房は借金がたまるから止めろと言うが、1回八文と書いて貸し出すものの借り手がない。余裕で明日は得意周りをしてくるから、氷飯をつくれと指示する。さて、これが大繁盛、貸し賃八貫に糞五荷。なんと、隣の雪隠に入ってカギをかけてふさげて、入ろうとしたら「エヘン」と咳払い、客は隣の雪隠に急行。腹がすいたら臭いのを我慢して弁当を使う。これは女房や子供に見せられたものではない。ある人の道歌に わが心かがみにうつるものならばさこそすがたの見にくかるめ わが身を愛すると思うて思いのほかに損ないます。と述べて、恐ろしい継母の話に続ける。(略)

本学のYさんは⑤自分の金儲けのことしか考えていない一番嫌いな考えだと断罪するが話の現代性は最高点を下している。Hさんは④夢だけ持っていて行動に移さなければ意味がない。切羽詰っていたのだから、隠れるより正々堂々とやればいい。④自分勝手に人を陥れていれてはいけない。現代に通用する話だから心に止めておきたい。今ほとんどこの様な人間模様である。などがある。この話は古典落語になっているが、善を行い、恥を知るといふことや、人は万物とつながっているという示唆は学ぶべきであろう。

お わ り に

梅岩死した後に残った物は筆と机だけだと言うが、「本心に従って人の道を自然にふみ行うこと」を自ら行い、封建道徳ではあるが日本人気質形成の教化に大功を残した。

鳩翁は、本心つまり無理のない心で五倫の道を行うことを仁なりとして、本心を先生にして生きる道をさまざまな人間を取り上げて面白く説いた。己れが己がの行く先は全く頼りにならずに目のつけようを間違うと「京の蛙と大阪の蛙」になり、高慢になると「さざえの自慢」になる。放心ばかりしていると心を紛失して仁が立たないから、我が心に立ち返ってみるべきだとして、義の端である羞悪を知るために恥知らず人の例を多引用する。

人は体ばかり直そうとして、千里の道をも医師を訪ねるが、心の曲がりをごそ直すべきだとして「膏藥を貼れ。」と体にもみ拘る人などに警告し、欲望のつけである「人のなく音を鹿が聞く」の心のゆき場の皮肉は現代人必聞の説話になっている。

「二の下」は話の中身は面白く奥が深い。心のゆがみについて、出奔武士が金を盗もうとした時、あひみての後の心にくらぶればむかしはものをおもざりけり の歌を見て思い留まったから、小さい時から手習いに精を出せと勧め、とかく金は恐ろしいという教訓になる。人は今日が良ければさらに他を願うから、思いのほか心がゆがみ、楽なことなのに、苦しんでうろたえる暗がりの心になってしまうという「八兵衛の行灯」は身につまされるもの楽しい。

「三」は、自分の身を養い心を主人にして行うことを主に、身勝手の極地「貸し雪隠」の落とし話になる。金のために人を陥れるだましは今日の商人への警鐘として秀逸話になっている。「恐ろしい義母の話」の自分かわいさが心の鬼の出現になる話も必読である。

「本が立たず脇が横行」し、人の道を立てる生き方の規準が希薄の世の中である故に、本質に従い「人の道を正しく生きる事が本物なのだ。」という教義は示唆に富む。それは、よりよく生きることに関わって、発生する困難点を掴みつつ、様々な抱負と阻害する障害を天命と受け取り、自らの本心に欺かず正しく生きよということとして傾聴に値する。

人間存在の原点を否定する尊属殺人、保険金殺人、いじめによる子供の死、年配者いじめ等を風船に入れて空気を出すと、滓は自分勝手と恥知らずが残るであろう。その対応はというと、無縁化を薄める惻隱の情を持つことと金より貴いものが有ることを家庭教育ですること。働きたいものに働き場を与えられる社会組織の再編成等がある。

善なる行為発揮の前提には生き物や環境に対するあわれみ、いたむ心情である惻隱の情や羞悪の見定めと是非の心も必要であり、金銭欲のみに生きてはならず、無理のない愛情である仁がとにかく必要だと考えたいものであり、其の根底には生活の健常さが必須になる。

梅岩の実践である「本心に従って、自分勝手をせず心心安らかにして真直ぐな道の歩みを、自然と天と一体化して、赤子となりてホギヤーの一声で行うこと」を大切にしたいという思いを強めつつ「上」の部を閉じる。(2010年10月)

参考文献

鳩翁道話 平凡社、石田梅岩 吉川弘文館、石田梅岩と都鄙問答 岩波新書 ほか多数